

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

2019年の展望を考えるに当たり、昨年2018年を振り返ってみると、当初想定していたように2017年と同様のレンジ相場が継続してしまいました。

年間の値幅は10円を下回り過去最少、2017～2018年の2年間を通して値幅は14円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が協調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、年明けの1月3日に108円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に4円以上の下落という動きが引き起こされました。

107円半ば以下では、公的年金のドル買いのうわさもあり、現在ではややドルが持ち直していますが、依然不透明な状況が続いています。

今後の相場は、米経済の成長が鈍化するのか、それに伴って米国の利上げが打ち止めとなるのか

ドル/円相場のトレード戦略

注目されることになるでしょうが、1月の米FOMCでは声明文から追加利上げのバイアスが削除されたことにより政策スタンスが大きく変わった可能性が指摘されており、当面の上値は限られたものとなりそうです。

ただし、その後の米経済指標は好調を維持するものも多く、早期に明確なファンダメンタルズの変化が起きる可能性は低く、また適温相場期待で米株式市場は堅調を維持しており目先ドルは底堅く推移しそうです。

当面は、108円から114円程度のレンジが想定されます。

■短期展望

先週は、111円後半で寄り付いたものの、前週末の良好な米雇用統計発表後もドルの上値が重かったこと、はトランプ大統領が、EUからの輸入品110億ドル相当に対し、関税を導入する意向を表明したことなどを受けて軟調な動きとなり、一時110円84銭まで下落しました。しかし、週末にはドル買戻しが優勢となり112円台を回復する動きとなりました。

今週も、ドルは底堅い動きが期待されるものの、日米貿易交渉で為替条項が取り上げられることが懸念されるため、交渉の行方を見極めるまでは大きく動きにくい相場となりそうです。